

# 研究活動

藤 吉 圭 二

2014年7月1日現在

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
(著書)						
1. 『日仏社会学叢書（第2巻）フランス社会学理論への挑戦』	共著	2005.3.31	恒星社厚生閣	モースは主著というべき「贈与論」をはじめいくつかの論文で「全体的人間」という概念を提起している。これは膨大な民族誌上の知見を踏まえた概念であるが、特徴的なことは、これがいわゆる原初的な社会に生きる人間のみならず、近代化された社会においても一般的な人間像であるとモースが捉えていた点である。合理的な選択に基づいて行動する近代的な人間像が、めざすべきものとしても、現状を説明する道具としても不十分性を露呈しつつある現代において、モースの提起した「全体的人間」像の有効性を確認した。（第二章「モースの社会理論—全体的人間と社会連帯」）	編者：大野道邦 共著者：大野道邦・藤吉圭二・山下雅之・前田至剛・菊谷和宏・池田祥英・中島道男・横山寿世理（掲載順）	79-95 頁
2. 『現代文化の社会学入門』	共著	2007.4.30	ミネルヴァ書房	モースが「贈与論」で展開した考察を踏まえ、現代の贈り物にかかわる事象を考察するための視点を整理して提示した。贈り物については、そのやりとりのなされる時点での贈る・受けとるという行為を見るだけでなく、その贈り物がどのような経緯でなされるにいったかという過去への視点、およびその贈り物がその後の当事者にどのような影響を及ぼしたかという未来への視点をもって見る事が重要であり、それによって社会を構造的に理解することが可能になってくることを示した。（第五章「贈り物—人はそれに何をこめるのか」）	編者：小川伸彦・山泰幸 共著者：名部圭一・澁谷知美・山田陽子・菅康弘・藤吉圭二・須藤廣・大淵裕美・山泰幸・足立重和・寺岡伸悟・工藤保則・森真一・真鍋昌賢・小川伸彦（掲載順）	27-52 頁
3. 『社会学ベーシックス1 自己・他者・関係』	共著	2008.10.10	世界思想社	モースが「贈与論」で展開した「全体的給付の体系」という概念について整理し、その体系が典型的なものと競争的なものとに分類されていることに着目し、物質的な豊かさの進行に伴う社会構造の複雑化が社会関係に根本的な影響を与えることを示した。すなわち、社会関係において重要な贈与という行為において、	編者：井上俊・伊藤公雄 共著者：田中紀行・井上俊・石川実・草柳千早・片桐雅隆・加藤一己・細辻恵子・織田年和・立木康介・亀山佳明・磯部卓三・今井信	159-168

				<p>典型的体系では「されたか／されなかったか」という二値的な、いわば判断の容易な評価基準が適用されるのに対し、競争的体系では「十分か／不十分か」という当事者間での合意にしばしば困難を伴う評価基準が適用され、この点が「友好の確認でありながら、その友好を動揺させる性格を含みもつ」贈与という現象に対する考察が、モースのなした民族誌的フィールドだけでなく、現代社会の諸問題の検討においても有効性をもつことを示した。（16「贈与 M. モース「贈与論」」）</p>	<p>雄・那須壽・山田富秋・永谷健・藤吉圭二・新雅陸人・土井隆義・山田真茂留・崎山治男・丸田健・柏端達也・長谷正人・吉田純（掲載順）</p>	
4. 『アーカイブズ情報の共有化に向けて』	共著	2010.2.28	岩田書院	<p>オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書管理は、植民地統治業務に関する本国イギリスへの報告の必要という事情から始まった。それが19世紀から20世紀へと世紀をまたぐあたりから、入植第一世代の高齢化、オーストラリア国家の部分的な独立などを背景として自国史や国民としてのアイデンティティの意識が高まり、それが政府の記録管理の整備を後押しした。しかし特に現用を終えた政府記録については原課、図書館、政府アーカイブズ機関のいずれが保管の責任をとるのか、また、保管による利用を保証するための現用時点での記録管理システムを政府内部にどのように浸透させるのかについて様々な問題が指摘され、それらの解決が一つひとつはかられた。（第2章「政府のアカウントビリティとアーカイブズ—20世紀前半のヴィクトリア州公文書管理を事例として」）</p>	<p>編者：国文学研究資料館アーカイブズ研究系 共著者：安倍尚紀・藤吉圭二・坂口貴弘・大友一雄・森本祥子・青山英幸・吉田千絵・五島敏芳・丸島和洋・村越一哲（掲載順）</p>	41-56
5. Archives, Accountability, and Democracy in the Digital Age	編著	2011.3.31	科研費による出版	<p>これまで社会的な調査・研究のための資料庫として見られることはあってもその機能自体が社会的考察の対象となることは稀であったアーカイブズが、ミクロレベルにおいてもマクロレベルにおいても重要な研究対象であることを、オーストラリア、ハンガリー等いくつかの事例を紹介しながら示した。</p>	<p>編者：Keiji Fujiyoshi 共著者： Kazuhito Isomura, Gentarō Mizugaki, Junta Okada, Sachiko Morimoto, Keiko Tamura, Takahiro Sakaguchi</p>	1-12
6. Archives for Maintaining Community and Society in the Digital Age	編著	2013.6.13	科研費による出版	<p>アーカイブズの多様な役割のうち特に政府のアカウントビリティ確保という機能に焦点を当て、それを三権分立のシステムと関連させて論じた。分立した三権は、いわゆるチェック・アンド・バランスによって共時的に牽制し合っているだけでなく、アーカイブズを基盤として行政の不備を立法の不備に遡及して行政の</p>	<p>編者：Keiji Fujiyoshi 共著者： Tadaaki Fujitani Anne Gilliland Nanako Hayami Izumi Hirano Kazuhito Isomura Sungman Koh</p>	1-14

あり方を適切に保つしくみを持っている  
ことを論じた。

Artur Lakatos

Andrew J Law

Sue McKemmish

Natália Cantó Milà

Junta Okada

Vrunda Pathare

(学術論文)						
1. モースの「全体性」概念の検討—「贈与論」を契機として	単著	1994.3.31	『京都社会学年報』第1号 京都大学文学部 社会学研究室	モースが「贈与論」において提起した「全体的社会事実」という概念は、「贈与論」のみではその内実の把握が不十分である。本論では、モースの他の論考を参照することによって、「全体的社会事実」概念の明晰化を試みた。		83-96 頁
2. 現代における「全体性」のかたち—モースにおける「人間観」の検討	単著	1995.12.25	『京都社会学年報』第3号 京都大学文学部 社会学研究室	民族誌学上の資料を駆使して展開されるモースの「贈与論」は一方で、そこから得られた知見を現代社会の編成にも応用しているという側面を持つ。本論では、従来あまり顧みられてこなかった「贈与論」のこの側面について、その有効性の検討を試みた。		111-125 頁
3. 労働に関する歴史社会学的研究の概観—戦後日本の展開を中心に	単著	1997.12.25	『京都社会学年報』第5号 京都大学文学部 社会学研究室	製造業を中心とする近代的産業における労働形態に関する研究には膨大な蓄積があるが、本論では、その中から歴史社会学的な視点を含みもつものをピックアップしたうえで、それらを通して明らかにされてきた、日本の近代的労働に特徴的なあり方を考察し整理した。		37-53 頁
4. 現代社会における「贈与の道徳」—モース「贈与論」における社会的提案の検討	単著	1999.2.21	『高野山大学論叢』第34巻 高野山大学	モース「贈与論」が企てたのは遍く人類の社会に贈与・受容・返礼の義務的三原則が存在することを明らかにすることであった。これを現代社会の編成に適用するにあたっては、もう一つ明らかにされた「気前よく」という原則をどう位置づけるかが問題となる。本論ではこの点の解明を試みた。		39-55 頁
5. 築90年の国際交流—「国籍・性別不問」京都大学吉田寮の試み	単著	1999.7.15	『ライフ・イベント語られる留学』 京都大学留学生研究会	本論は、京都大学留学生研究会が京都大学に在学する留学生を対象にして作成された調査報告の一環として執筆された。筆者が寄宿していた学生寮での留学生との交流を、大学院入試のための日本語学習を中心にまとめ、それとともに学生寮における留学生の地位・身分がはらむ問題点について解明を試みた。		117-141 頁
6. 組織の生成物としての権威—権威の関係主義的確定に向けて (磯村和人著『組織と権威—組織の形成とダイナミズム』書評論文)	単著	2002.2.21	『高野山大学論叢』第37巻 高野山大学	磯村和人著『組織と権威』の書評を通じて、近代社会研究の学としての社会学にとって、組織研究がいかなる位置をもつかを検討した。すなわち、いわゆる「共同体からの離脱」が社会における個人の析出・自立を意味する一方で、にもかかわらず「自立した意志をもつ個人」の集合によって形成される組織において個人		103-123 頁

				の意志が制御・抑圧されることについて確認し、そのような制御・抑圧のエージェントとしての「組織権威」の生成過程が本書においては適切に整理されていることを確認し、今後の方向性について展望を示唆した。		
7. 近代社会における「気前のよさ」—モースによる同時代への発言をもとに	単著	2003.2.21	『高野山大学論叢』 第38巻 高野山大学	モースは「贈与論」で、いわゆる原初的な社会に見られる贈与の義務的三原則の同時代の社会における復権を唱えたが、その議論を彼の実社会における協同組合運動への取り組みと重ね合わせてみると、原初的な社会における「無意識的な気前のよさ」が近代においては「制度化に基づく気前のよさの意識化」という契機の見られることを指摘し、それを通じて原初的な社会の研究を通して近代社会の問題を考察するさいのモースの戦略の特徴を整理した。		41-54 頁
8. 現代の四国遍路と接待—歩き遍路の意味	単著	2004.1.15	加賀美智子・村上保壽・山陰加春夫(編著) 『遍路学』 高野山大学通信教育室	四国遍路において接待は古くから見られる伝統的な習俗であるが、特にその現代的な意義について考察した。前近代まで、わが国に暮らす大多数の人々が所属していた伝統的共同体を「私は何者であるか」を説明する必要性の希薄な社会と、対して近代以降、都市化された社会をその必要性が高まった社会と位置づけ、それによってもたらされる緊張を接待が緩和する効果を持つことを論じた。		235-251 頁
9. 現代の四国遍路における「接待」—「配慮無用の親切」という視点から	単著	2004.2.21	『高野山大学論叢』 第38巻 高野山大学	上記9をさらに敷衍し、四国遍路における接待の現代的意義について弘法大師信仰との関連性を加味して論じた。四国八十八箇所を経巡る遍路者は、必ずしも既成の宗教教団の示す指針に基づき教団の示す宗教的階梯を念頭に置いて遍路するものとは限らず、むしろ一人で遍路をつづける中で「わたしのお大師さま」というかたちで同行二人を意識し、それを通じて現実の中で求められる社会的な役割を離脱し、自己との実存的な向かい合いを体験することとなり、この意味で社会的役割に縛られて生きざるをえない現代人にとって、遍路が重要な「浄化作用」を持つことを論じた。		25-40 頁
10. 高野山古地図を利用した追記可能なデジタル教材の作成	共著	2004.11.25	『情報教育方法研究』 第7巻第1号 私立大学情報教育協会	歴史的に重要な資料はしばしば貴重な文化財でもあり、現物の利用が従来大幅に制限されていた。こうした歴史的文化的史料をデジタル化し高精細画像での閲覧を可能にすることで、専門家のみなら	山陰加春夫との共著	41-45 頁

				<p>ず院生や学部生もそれらを研究の資料として活用できるようになる。さらにデジタル化は貴重資料のインターネット上での公開にも道を開くものである。こうした課題について高野山大学所蔵の高野山古地図を事例として検討し、教育・研究に効果があることを示した。</p>	
<p>11. 電子ネットワーク時代の組織記録 —オーストラリア・ヴィクトリア州のVERSを事例として—</p>	<p>単著</p>	<p>2006.2.21</p>	<p>『高野山大学論叢』 第41巻 高野山大学</p>	<p>組織の記録は、それが保存・蓄積されると一般にアーカイブズと呼ばれる。公的・私的にかかわらず、組織は自らの活動のなかで記録を生成し、それを蓄積する。その蓄積は、自らの活動の証しとなるものであり、特に公的組織の場合にそれはアカウンタビリティの重要な証拠となる。この視点から本論では、インターネットが発達し、電子文書化の進むなかでこのアカウンタビリティを確実なものとするためにオーストラリア・ヴィクトリア州が推進する <b>VERS: Victorian Electronic Records Strategy</b> の意義を確認した。</p>	<p>1-21 頁</p>
<p>12. Cultural Heritage and Digital Technologies: The Case of Koyasan University</p>	<p>単著</p>	<p>2008.3.15</p>	<p>Esoteric Buddhist Studies: Identity in Diversity, Koyasan University</p>	<p>貴重な文化資源のデジタル化は歴史的・文化的研究への貢献を大いに期待できるということを、以下のようなみつつの場合に分けて論じた。(1) 古地図など視覚的な資料は、貴重な文化財であるということが妨げとなって集中的な研究の対象となりにくいが、それをデジタル化することによって、現物を劣化させる恐れなく、研究対象とすることができる。(2) 寺院文書のように群をなして保存されている古文書類の場合には EAD/XML によるデータベース化によって、やはり現物の劣化の恐れなく研究対象とすることができると共に、群としての検索も容易となり、その後の研究の推進に資する。(3) 上記ふたつのデジタル技術利用に加え、現存しないもの(古墳や建造物、町並みなど)を複数の資料をもとにコンピュータグラフィックスを用いて仮想的に再現することで、現存時の様子を視覚的に確かめることができる。これらのことにより、歴史的・文化的研究へのデジタル技術の適用は、今後さらなる推進が期待される。</p>	<p>361-365 頁</p>
<p>13. 記録管理を支えるもの—草創期のオーストラリア・ヴィクトリア州を事例として—</p>	<p>単著</p>	<p>2009.3.26</p>	<p>『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』 第5号(通巻40号)</p>	<p>オーストラリア・ヴィクトリア州は、その先進的な電子的記録管理政策である <b>VERS</b> によってアーカイブズの世界では広く知られている。しかしその背景を見</p>	<p>23-34</p>

				ると、そもそも今のオーストラリア国家がイギリスの植民地として始まっていること、それゆえ開拓当初は統治業務に関して本国への報告をする必要があり、そのために記録管理への注意が高かったという事情のあること、そして、時代の経過に伴って本国への報告義務が市民への報告義務へとアカウントビリティの内実を変化させていったことがわかった。	
14. 過疎地における大量の人口移動を伴う観光事業への取組み—奄美大島・龍郷町を事例として—	単著	2010.2.21	『高野山大学論叢』 第45巻 高野山大学	2009年7月の皆既日食に合わせて九州南部の島々では日食観察ツアーが官民挙げて実施された。普段は過疎地とも呼ばれるような場所にテントサイトを設置して大量の観光客を受け入れた。特に有名な観光地として大量の観光客に対処してきた経験を持つわけではない各地においては受入れにまつわるトラブルが危惧され、またそれへの対策が準備された。本稿では奄美大島・龍郷町での皆既日食ツアー観光客の受入れについて、その準備段階、日食ツアー期間中にわたる受入れ側の取組みを、現地のテントサイトに滞在しながら聞き取りも含めた調査を実施し、この地の取組みがいわゆる大規模リゾート開発に頼らない、「身の丈にあった観光事業」の特徴を備えていることを示した。	55-70
15. ネットワーク時代のアーカイブズ—アカウントビリティ確保の拠点として—	単著	2010.2.26	『アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究』 国文学研究資料館	アーカイブズがアカウントビリティ確保の拠点として期待されるのは、「立法の定めたルールに従って行政が業務を遂行したことを証拠立てる記録を残す」という機能を持つからである。民主党政府の「事業仕分け」だけでなく、地方自治体においても事業の見直しが進められているが、アーカイブズに対する外部監査が上記の視点をどの程度もちつつ行なわれているかについて、京都、北海道など代表的な事例をもとに検討し、必ずしもそうした視点が十分ではなく、経費削減に偏した監査が今後も行われる危険があることを示した。	119-127
16. 政府機関横断的な記録管理に必要なもの—オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書管理法成立前夜—	単著	2010.3.26	『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』 第6号 (通巻41号)	政府機関横断的な記録管理システムが整備されるには、(1)記録が業務遂行中の参照のため、業務完了後の説明のためという両面で重要なこと、(2)記録管理はそれを通じて政府各機関の業務スタイルを管理することにつながり、一方的な押しつけは困難なこと、この2点の理解が重要である。これについて記録管理スタイ	33-47

				ルの標準化の途上にあった20世紀半ばのオーストラリア・ヴィクトリア州の事例に即して検討し、アーカイブズ機関の設立がこの2点の解決と結びつくことの重要性を示した。	
17. 情報処理から情報発信へ—高野山大学での情報教育—	単著	2010.3.25	『密学会報』 第48号	高等学校の普通教科において2003年より情報教育が必修となったことを受け、本学における情報教育がどのように対応したかを概観し、それを踏まえ、そうした基礎的な情報教育の上に本学独自の情報教育がどのようにあるべきかについて論じた。特に専門教育の場で学習内容に即した情報技術の活用が望まれることを、その活用の萌芽的な例を見ることによって示した。	1-12
18. 体制転換とアーカイブズ—ハンガリー国立アーカイブズを事例として—	単著	2011.3.1	『高野山大学論叢』 第46巻 高野山大学	ハンガリーはいわゆる「壁の崩壊」を機に共産党独裁体制から多党制への転換を遂げ、およそ20年を経過している。国家の公的記録の保管を任務とする国立アーカイブズは体制転換前の記録も大量に保存している。通常のレコードスケジュールに照らせば、すでに共産党独裁時代の諸記録が公開され始めてよい時期にあるが、それらのなかには独裁時代の負の記録も存在し、その公開が現在の政治状況に影響を及ぼしかねないものがある。これらの扱いを中心に現地で聞き取り調査を実施し、これとは別に実施した House of Terror の展示内容調査とも比較しながら国立アーカイブズの現状をまとめた。	1-16
19. 公文書は誰が守るのか—オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書管理法とハリー・ナン—	単著	2011.3.18	『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』 第7号 (通巻42号)	オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書管理における重要な画期として1973年の Public Records Act 1973 成立を挙げる事ができる。これは州公立図書館の上級アーキビストに就任したハリー・ナンの努力によるところが大きい。そこで取り上げられた論点は、現在取り沙汰される MLA 連携において注意すべき各機関の役割分担を考えるうえでも重要なものであることを示し、それを通じて公的アーカイブズにならなければならないべき任務を論じた。	17-33
20. ふたつの地域アーカイブズ—DIVA と GLBT 歴史協会の取組みを事例として—	単著	2012.3.15.	『高野山大学論叢』 第47巻 高野山大学	サンフランシスコで San Francisco State University が推進している DIVA (Digital Information Virtual Archive) および GLBT Historical Society が運営している GLBT Historical Museum の現地調査を踏まえ、組織アーカイブズやテーマアーカイブズ	21-37



				が、所在地の特色を生かした地域アーカイブズとして活用されることを示した。		
21. 社会学の立場から考 える「臨床」	単著	2012.6.23	『日本臨床政治学 会ニューズレター』 No.8	社会学における「臨床」という視点の 意義を臨床社会学の知見に沿って整理し た上で、多くの臨床社会的知見がいわ ばマイクロレベルの領域に多く見られるの に比して、その視点そのものはもっとマ クロなレベルにおいても適用可能であり またそれが有効性を持つことを、アーカ イブズ研究の社会的意義を中心に論じ た。		12-16
22. 電子政府定着への取 組み—オーストラリ ア・ヴィクトリア州政 府を事例として—	単著	2013.2.10	『高野山大学論叢』 第48巻 高野山大学	オーストラリア・ヴィクトリア州にお いて州公文書館 (Victorian Archives) が主 導して進めている政府業務文書の電子化 について現地調査を踏まえて概観した。 調査は政府諸機関の担当者を集めた VSC (VERS Steering Committee)のほか、ビジネ ス・技術革新省 (DBI)、運輸省 (DT)、 財政・金融省 (DTF) で実施した。業務 文書の管理は各機関の業務遂行のスタイ ルに強く規定されており、それを電子化 に適合的なスタイルへと修正していくに は機関内に強力なサポーターが必要とい う不可欠と言うことがわかった。		15-37
23. 情報の共有と負担の 共有—スウェーデン の情報公開制度とそ の背景—	単著	2014.2.10	『高野山大学論叢』 第49巻 高野山大学	スウェーデンの情報公開制度は1766年 にまで遡ることができる。このことから もスウェーデンは民主的な国家運営とい う点で国際的に高い評価を受けることが 多い。その現状の一端をナショナルアー カイブズおよび大学アーカイブズの現地 調査によって明らかにするとともに、こ のような制度が早い時期から成立し得た 背景を歴史的に検討した。		89-112
(その他)						
1. 「敵意」に転化する 「好意」—「贈与論」 における「気前のよ さ」をめぐって (研究 ノート)	単著	1995.10.31	『ソシオロジ』 第40巻2号 社会学研究会	モースの「贈与論」において整理のむ ずかしい概念のひとつに「気前のよさ」 がある。本論では、モースにより「贈与 の義務的三原則」として定式化された贈 与・受容・返礼がその有無を二値的に判 定できる〈行為〉であるのに対して「気 前のよさ」がそういった判定の困難な、 むしろ人間の社会関係に「それで十分か どうか」という計量可能性を持ちこむよ うな〈態度〉であることを指摘し、そう		115-130 頁

				いった視点から「贈与論」を再検討する必要性を提起した。		
2. 高野山におけるデジタルアーカイブ—高野山大学の取り組みを中心に（報告と展望）	単著	2003.3.31	『密教文化』第210号 密教研究会	高野山大学の所蔵する古地図や曼荼羅などの図像資料がデジタル化によって現物を傷めることなく活用できるようになること、および寺院文書のような大量の文書類もデジタル化することによって検索が格段に便利になること、そして、両者を組み合わせるデジタルコンテンツの作成が本学の教育活動において学生のモチベーション喚起という点でも有効であることを論じた。		1-30
3. 報告：国際社会学機構第38回世界会議（依頼原稿）	単著	2008.11.30	『アーカイブズ学研究』9、日本アーカイブズ学会			84-89
4. 第38回国際社会学機構世界会議参加記 レギュラーセッション ‘Archives, Accountability, and Democracy in the Digital Age’ を終えて（依頼原稿）	単著	2009.3.31	『記録と史料』19、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会			22-26
5. 社会学事典（項目執筆）	単著	2010.6.30	丸善	「贈与論」—モース（項目執筆） フランス社会学の基礎を築いたデュルケームのあとを受けていわゆる「年報学派」を牽引したモースの著書である「贈与論」について、その議論の主要部分を概説すると共にその後それがどのようなかたちで展開していったかを概観した。 スーブニール論（項目執筆） 現代社会においても根強く慣習として残っているおみやげが、その由来のひとつとして宗教的な意義をもっていたことを示し、それが時代の変化につれてどのように変化しつつ維持されてきたのかを概観し、これが世界史のレベルにおいても重要な意義をもつことを提示した。	日本社会学会社会学事典刊行委員会編	140-141
6. 時を貫く記録の保存—日本の公文書館と公文書管理法（企画・編集）	共編	2011.3.31	岩田書院	2009年7月26日、京都市・京大会館において開催した公開シンポジウム「市民社会の財産としての公文書・地域資料を考える」の内容を書籍化したもの。国立公文書館館長・高山正也氏の講演、高山氏と京都府立総合資料館館長・井口和起氏との対談、近江八幡市地域文化課・鳥野茂治氏の報告に続くパネルディスカッションで藤吉が司会を務めた。末尾の「エ	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会 編	610-611

				ピローグ」(p.93)を執筆すると共に内容全体の編集を担当した。	
7. ハンガリー国立アーカイブズ (National Archives of Hungary) 訪問記 (依頼原稿)	単著	2011.3.31	『記録と史料』21、 全国歴史資料保存 利用機関連絡協 議会		29-30
8. 第112回例会報告(7月)「オープンソースのアーカイブ資料管理情報システム—日本語化の取組みと試用実践の一例—」	単著	2012.3	『Network』47、 全史料協近畿部会		2-3
《書評》					
1. Mauss, Marcel, 1997, <i>Ecrits politiques: Textes reunis et presentes par Marcel Fournier</i> , Paris: Fayard.		2000.12.25	『ニューズレター』 第1号 デュルケーム/デュルケーム学派研究会		5-7
2. 佐藤博樹・石田浩・池田謙一(編)『社会調査の公開データ—2次分析への招待』東京大学出版会、2000年。		2003.3.25	『記録と史料』 第13号 全史料協		58-61
3. 荻野昌弘(編)『文化遺産の社会学—原爆ドームからルーブル美術館まで』新曜社、2002年。		2004.3.25	『記録と史料』 第14号 全史料協		83-87
4. 原田正純・花田昌宣(編)『水俣学研究序説』藤原書店、2004年。		2006.3.25	『記録と史料』 第16号 全史料協		62-64
5. 荻野昌弘『零度の社会』世界思想社、2005年。		2006.5.31	『ソシオロジ』 第156号 社会学研究会		199-203
6. デジタルアーカイブ推進協議会(編)『デジタルアーカイブ白書2005』デジタルアーカイブ推進協議会、2005年。		2007.3.25	『記録と史料』 第17号 全史料協		41-44

7. 清水強志『デュルケームの認識論』恒星社厚生閣、2007年。	2007.3.30	『日仏社会学会年報』17、 日仏社会学会		255-260
8. 木下敏之『日本を二流IT国家にしないための十四カ条』日経BP、2006年。	2008.3.25	『記録と史料』 第18号 全史料協		68-71
9. 赤井伸郎『行政組織とガバナンスの経済学』有斐閣、2006年。	2011.3.31	『記録と史料』 第21号 全史料協		69-72
10. 岡本哲和『アメリカ連邦政府における情報資源管理政策—その様態と変容—』	2012.3.31	『記録と史料』 第22号 全史料協		70-73
11. 石川徹也・根本彰・吉見俊哉編『つながる図書館・博物館・文書館』	2012.11.30	『アーカイブズ学研究』No.17 日本アーカイブズ学会		120-125
12. チャールズ・O・ロソッティ『巨大政府機関の変貌 初の民間出身長官が挑んだアメリカ税務行政改革』	2013.3.31	『記録と史料』 第23号 全史料協		71-74
《翻訳》				
1. ジャン・カズヌーヴ『マルセル・モースの社会学』（未発表） (Jean Cazeneuve, Sociologie de Marcel Mauss, PUF, 1968)				
《研究報告》				
1. モースにおける「往時」と「現代」—「贈与論」における同時代への提案をめぐって	1997.11.9	第70回日本社会学会（千葉大学）	一般研究報告	
2.				

近代社会における『気前のよさ』—モースによる同時代への発言をもとに	2002.9.28	第5回 デュルケム／デュルケム学派研究会 (西南学院大学)	研究報告		
3. 高野山古地図を利用した自己増殖的デジタル教材の作成	2002.10.26	平成14年度 情報処理教育研究集会 (東京大学)	分科会報告		
4. 整理と公開をめぐる—誰が、どのようにして、誰のために	2002.12.24	公開シンポジウム 情報社会と archives —図書館・文書館・博物館をめぐる (国文学研究資料館史料館)	シンポジウム報告		
5. マルセル・モースのナショナリズム論	2003.5.24	関西社会学会 第54回大会 (追手門大学)	一般研究報告		
6. 高野山古地図をデジタル画像でみる	2003.5.16	密教研究会 平成15年度大会 (高野山大学)	テーマ報告		
7. 高野山古地図を利用した画像資料と文字資料の融合	2003.9.12	平成15年度 大学情報化全国大会 (東京私学会館)	分科会報告		
8. マルセル・モースと協同組合運動—「われわれの社会」における「気前のよさ」をめぐる	2003.10.12	日本社会学会 第76回大会 (中央大学)	一般研究報告		
9. 「庶民」の連帯—モースの社会構想	2003.10.18	日仏社会学会 2003年度大会 (関西学院大学)	シンポジウム報告		
10. 巨大曼荼羅図のデジタル化と活用	2003.11.15	平成15年度 情報処理教育研究集会 (北海道大学)	分科会報告		
11. フランスにおける文書館学の展開	2004.2.14	科学研究費補助金・基盤研究(A)(1) 「歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基礎構築にむけての研究」アーキビスト養成機関情報収集プ	研究報告		

			プロジェクト研究会 (国立国語研究所)			
12. 高野山古地図を利用 した自己増殖的デジ タル教材の作成		2004.7.10 一次選考 2004.9.11 二次選考	平成16年度 情報処理教育方法 研究集会 (東京私学会館)	論文掲載のための報告審査会		
13. 視覚資料デジタル化 の効果と課題 —高野山古地図を事 例として		2004.12.11	平成16年度 全史料協近畿部会 古文書研究会 (奈良県女性会館)	研究報告		
14. 歴史資料活用におけ るデジタル技術の役 割—高野山大学の取 り組みを事例として —		2006.4.22	日本アーカイブズ 学会2006年度大会 (学習院大学)	研究報告		
15. 史料保存機関をめぐ る最近の動向につい て		2006.6.24	全史料協近畿部会 近世古文書研究会 第79回研究会 (奈良県女性会館)	研究報告		
16. 電子ネットワーク時 代の文書管理—オー ストラリア・ヴィクト リア州を事例として —		2006.7.8	全史料協近畿部会 公文書研究会 第32回研究会 (大阪市立難波市 民学習センター)	研究報告		
17. Cultural Heritage and Digital Technologies		2006.9.7	高野山国際密教学 術大会 (高野山大学)	研究報告		
18. ヴィクトリア州立公 文書館のVERSについ て		2006.12.9	日本アーカイブズ 学会/科学研究費 「歴史情報資源活 用システムと国際 的アーカイブズ・ネ ットワークの基礎 構築にむけての研 究」共催研究集会 (学習院大学)	研究報告		
19. デジタル技術を利用		2006.12.8	地域資料シンポ第	研究報告		

した歴史資料活用の 試み—高野山大学を 事例として—			9回準備研究会 (大阪市立梅田市 民学習センター)			
20. 高野山古地図を利用 した自己増殖的デジ タル教材作成の研究		2007.3.29	新生わかやま共同 研究支援事業成果 報告会 (和歌山大学 生涯学習センター)	研究報告		
21. 現物資料のデジタル 化とCGによる仮想 再建		2007.10.6	シンポジウム「仏教 関連資料のデジタ ル化の現状と将来」 (仏教大学)	研究報告		
22. ネットワーク時代の アーカイブズ—アカ ウンタビリティ確保 の拠点として—		2007.10.20	国文学研究資料館 アーカイブズ研究 系プロジェクト研 究会	研究報告		
23. ヴィクトリア州公文 書館における記録管 理について		2008.2.22	全史料協近畿部会 例会第94回 (京大会館)	研究報告		
24. Regular session 'Archives, Accountability, and Democracy in the Digital Age'		2008.6.28	The 38th World Congress of the International Institute of Sociology Central European University, Budapest, Hungary	セッション座長		
25. Thematic Session 'Archives in the Information Society'		2010.11.7	The 83rd Annual Meeting of Japan Sociological Society	セッションコーディネーター		
26. 「アカウンタビリテ ィ」再考		2011.4.24	日本アーカイブズ 学会 2011 年度大会 (学習院大学)	研究報告		
27. Archives for Maintaining Community and Society in the Digital Age		2012..2.19	The 40th World Congress of the International Institute of Sociology Delhi, India	Session Convener		
28. 社会学の立場から考 える「臨床」		2012. 4. 21	日本臨床政治学会 2012 年度東京大会 10 周年記念シンポ ジウム—「臨床」に ついて考える—	シンポジスト		

			専修大学、東京			
29. 文化・知識・科学II		2012.5.27	第63回関西社会学 会大会、皇學館大 学、三重	部会座長		
30. Language and Society		2014.7. 13-19	XVIII ISA World Congress of Sociology	Session Organizer of the 25th Research Committee (Language and Society)		
《競争的資金》						
1. 歴史情報資源活用シ ステムと国際的アー カイブズネットワー クの基盤構築に向け ての研究	共同 研究 者	2003～ 2005年度	日本学術振興会	科学研究費補助金（基盤（A）） 課題番号：15202015（配分額：なし）		
2. 高野山古地図を利用 した自己増殖的デジ タル画像作成の研究 （研究代表者）	研究 代表 者	2003～ 2004年度	高等教育機関コン ソーシアム和歌山	新生わかやま共同研究助成事業 （配分額：400万円）		
3. 3DCGを用いたインタ ラクティブな高野山 立体地図作成の研究	研究 代表 者	2006年度	高等教育機関コン ソーシアム和歌山	大学等地域貢献促進助成事業 （配分額：120万円）		
4. オーストラリアと日 本の自治体における 業務記録管理システ ムの比較研究	研究 代表 者	2006～ 2008年度	日本学術振興会	科学研究費補助金（基盤（B）） 課題番号：18330117（配分額（直接経 費）：720万円）		
5. 国際学会派遣事業		2008年度 第1期	日本学術振興会	The 38th World Congress of the International Institute of Sociology (Budapest, Hungary 開 催) に参加のため		
6. 国際比較に基づくアー カイブズと社会の 関係に関する総合的 研究	研究 代表 者	2010～ 2013年度	日本学術振興会	科学研究費補助金（基盤（B）） 課題番号：22330164 （配分額（直接経費）：980万円：～2012 年度）		



所属	文学部	職名	教授	氏名	藤吉 圭二	大学院の授業担当の有無 ( 有 ・ 無 )
教育活動						
教育上の主な業績		年月日	概 要			
1. 教育内容・方法の工夫 板書のさいの配慮		1998.4 -	<ul style="list-style-type: none"> <li>・板書は大きく読みやすい字で書くように心がけている。基本的には「そのままノートに写せば授業内容のまとめとなる」ように、かなりの分量を板書する。また「講義のポイントとしてきちんとノートしてほしい内容の板書」と「講義の中で副次的に触れるやや脱線した内容の走り書き」とは区別して板書するようにしており、板書の見やすさに関しては一定の評価を学生から得ている。</li> </ul>			
解説のさいの配慮		1998.4 -	<ul style="list-style-type: none"> <li>・解説時には大きく明瞭な発話を心がけている。ただし、ゆっくり話すと言のびしてかえって聴き取りにくくなり、また授業時間内に盛り込める内容も制限されるので、どちらかというと早口で話し、重要なポイントについては簡潔にゆっくり繰り返すという方法で解説を進めている。</li> </ul>			
予習用「宿題プリント」の作成		1998.4 - 2006.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2回生向けの学科必修講義では、あらかじめ毎週の講義で読んでいくテキストの範囲を指定し、その範囲内で重要な内容について受講前に該当部分を読んでまとめ、授業時に提出するという「宿題プリント」を毎週の課題とし、採点のうえ返却し授業理解の補助にするとともに復習の手がかりとなるよう配慮している。また採点の際には内容的な面だけでなく、文章としてのまとまり、誤字脱字、文字の丁寧さなどについても必要に応じてコメントを付し、学生の注意を喚起するよう心がけた。さらに後期には宿題プリント作成にあたり手書きではなくパソコン出力を義務づけ、ワープロソフトの利用、プリントアウトの割付などに習熟することができるよう心がけている。</li> </ul>			

卒論作成のサポート	2000.4 - 2006.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4回生向けの学科必修演習では、4月から準備を始めて12月中旬までには卒業論文が仕上がるよう早め早めにスケジュールを示して作成を促している。授業期間中はもちろん、夏季休業中に宿題として参考文献の抜き書きを数ページ分つくり、それを自分の関心に応じて分類して見出しをつけるという作業を課し、秋以降それをもとに卒論の構成および執筆に戸惑いなく取りかかれるような誘導をかけている。</li> </ul>
要約問題の活用	1999.4 - 2006.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2回生向けの学科必修講読では、毎週講義の前半でその時間のポイントを解説し、後半にテキストの一定の範囲を指定してその内容を要約するという課題を課している。目標は、内容の理解は基本的な前提として「限られた時間の中でテキストの内容を把握し、一定水準の簡潔な説明を作成する」ということに置いている。毎回つぎの授業時に採点のうえ返却し、再度要約すべきテキストの内容を解説して復習を心がけている。この方法によってテキストに書かれた必要事項、および原稿用紙使用時の注意事項の定着がはかられている。</li> </ul>
休暇時レポート課題の活用	1998.4 - 2006.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どの授業においてもできるだけ夏季休暇、冬季休暇中にレポート課題を課している。その目標は関連分野への知識・関心を広める、およびレポート作成を通じてワープロによる文書作成およびプリントアウトの設定に慣れるという2点に置いている。</li> </ul>
パソコン活用のためのサポート	1998.4 -	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域的な問題、あるいは本人が不慣れであったりしてIT関連の情報・サポートが容易には得られない学生が多いため、要望があればパソコン購入の相談にのったり、インターネットプロバイダとの契約についてアドバイスしたりということを意識的にやり、また授業時にサポートの必要な場合は問い合わせるようにとアナウンスを行なっている。また独自に購入したタイピング練習用ソフトを使って、研究室で希望する学生に練習の時間を提供している。</li> </ul>

卒論のための資料収集法の 教示	2001.4 – 2006.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題演習（卒論ゼミ）においては、年度始めの早い時期にインターネットを利用した資料検索およびインターネット上での図書館蔵書検索の方法を提示し、大学の地理的な面にかかわる資料収集の不便さをできるだけ緩和するように心がけている。</li> </ul>
学習内容の現実社会との関 連づけへの配慮	2004.4 – 2006.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「経済学／暮らしと経済」においては、授業で解説する経済学の諸項目と現実の社会における経済活動とを関連づけて理解することを容易とするために、新聞に掲載されている株価表を利用して「株の売買ゲーム」を実施した。これにより株価の上下、企業評価の上下、当該業種の好不況、そして日本経済の好不況が相互に密接に関連することへの理解を深めるとともに、名前しか知らないような大企業の活動への興味・関心を高めることにも活用できた。</li> </ul>
試験の自己採点を通じた自 己評価基準の涵養	2008.4 –	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「社会学」の期末試験において、試験→採点基準の公開による自己採点→自己採点と実際の採点との差異の公開という作業を通じ、ともすれば学生にとってあいまいとなりがちな評価基準を提示している。これと毎講実施する小テストによって、自分の学習成果と実際の成績との相関を意識できるよう努めている。</li> </ul>
動画作成を利用した学生自 身による情報発信の促進	2010.9 –	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「総合科目（デジタルアーカイブ）」の授業において学生同士の相互インタビューを実施し、その編集映像を You Tube 上に公開している。ネット上で人目にさらされることを意識しつつ相手から話を聞き出したり、またその様子を編集したりする作業のなかでネット上で情報発信する際の注意点について意識できるよう努めている。インタビュー映像を通じ、本学学生の雰囲気や垣間見ることができるという効果も有する。</li> </ul>
ブログを利用した学生自身 による情報発信の促進	2011.4 –	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「情報処理」の授業において学生にブログ（「はてなダイアリー」による）の作成を指導し、自分の受講する授業について学んだこと、そこから生まれた疑問点などを定期的に記述する作業を課し、実践を通じて情報発信能力を養うと共にネット利用に</li> </ul>

<p>新入生向け「日本語」での高目との連携</p>	<p>2012,4-</p>	<p>当たつてのエチケット（ネチケット）意識の涵養に努めている。授業紹介を通じ、本学学生の日常を垣間見ることができるという効果も有する。</p> <p>・新入生向け科目「空海思想入門」（前期）「積尊伝」（後期）で取り上げられたトピックを別の観点から「日本語」授業で取り上げ、復習の効果を狙うと共に学んだことをどう活用するかに関する練習の場を提供する。</p>
<p>2. 作成した教科書、教材、参考書</p> <p>日本語 I・II</p>	<p>1998.4 - 2006.3 1998.4 - 2006.3 2003.4 - 2004.4 - 2006.3 2005.4 -</p>	<p>・卒論作成のてびき（毎年少しずつ改訂） ・宿題プリント（2回生向け講義、毎年少しずつ改訂） ・復習プリント（フランス語） ・株価推移表、株価売買表（経済学／暮らしと経済） 新入生向け「日本語」テキスト</p>
<p>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p> <p>発表：高野山古地図を利用した自己増殖的デジタル教材の作成</p> <p>発表： 高野山古地図をデジタル画像で見る</p>	<p>2002.10 平成14年度情報処理教育研究集会（東京大学）</p> <p>2003.5 密教研究会（高野山大学）</p>	<p>本学所蔵にかかる高野山古地図をデジタル画像化するという作業を通じ、従来は利用の困難だった貴重な文化財を利用して教育・研究活動を活性化するという試みを報告した。</p> <p>本学所蔵にかかる高野山古地図をデジタル画像化することによって、高野山史研究においていかなるメリットを期待できるかという点について報告した。</p>

<p>発表： 高野山古地図を利用した画像資料と文字資料の融合</p>	<p>2003.9 平成 15 年度大学 情報化全国大会 (東京私学会館)</p>	<p>本学所蔵にかかる高野山古地図をデジタル画像化し、従来は気軽に閲覧できなかった貴重な文化財を教育・研究の場で活用できるようになったこと、さらには画像に解説の文字ボックスを適宜付加していくことにより、画像資料をひとつのインデックスとして高野山史研究を促進することが可能であるという点について報告した。</p>
<p>発表： 巨大曼荼羅図のデジタル化と活用</p>	<p>2003.11 平成 15 年度情報 処理教育研究集 会 (北海道大学)</p>	<p>チベット、ムスタン地区の寺院壁画として描かれた巨大曼荼羅図の撮影写真をデジタル化して教室で上映すると、教材としての利用が容易になり、曼荼羅世界に関する理解が深まること、また画像内に解説の文字ボックスを付加していくことによって教材としての画像の価値をさらに高めることができることを報告した。</p>
<p>公開授業： 社会講義 I</p>	<p>2003.11</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学内 FD 委員会主催による公開授業実施 (学科 2 回生向け社会講義 I)</li> </ul>
<p>講演： 「情報教育・教育の情報化」 研修会</p>	<p>2004.1 和歌山大学教育 学部教育実践総 合センター(和歌 山県立図書館)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタルコンテンツを利用した教育方法の開発について、小中学校現場の先生方とともにパネルディスカッションをつとめ、藤吉はコンテンツ作成の立場から大学現場はコンテンツ作成そのものが教育活動と密接にリンクしていることについて事例を挙げて説明した。</li> </ul>
<p>講演： 「高野山古地図」から歴史を 読み解く」—インターネット によって変わる「歴史資料の かたち」—</p>	<p>2004.12 きのくに県民カ レッジ(和歌山県 立図書館)</p>	<p>世界遺産登録にからめて高野山の紹介を行ない、デジタル化された歴史資料のインターネット上での公開の意義について解説した。主な内容は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネット上での公開を前提とした歴史的資料 (絵図、建築物、文書等) のデジタル化について</li> <li>・高野山の歴史に関する講話 (「絵図」を通じて分かる空間構造の変化など)</li> <li>・インターネットの普及と変化する歴史資料のかたち—高野山を事例として</li> </ul>
<p>4. その他教育活動上 特記すべき事項  非常勤講師</p>	<p>- 2000.3</p>	<p>四天王寺国際仏教大学 (社会学入門・外書講読)</p>

資料デジタル化による教育・研究活動の活性化	2001 -	学内資料のデジタルアーカイブ化を踏まえた教育・研究活動の活性化
高大連携授業	2003	和歌山県立伊都高校での福祉・社会一般授業への出講
放送大学わかやま学習センター面接授業講師	2005.2	「アーカイブとIT」というテーマでインターネットの普及を前提とした文化遺産公開の取り組みについて解説

学会等および社会における主な活動（藤吉）

2001.9	デュルケーム／デュルケーム学派研究会 in 高野山受入
2001.10.	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会（高野町役場）
2002.3.	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会（和高社研）
2002.4.	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会（高野町商工会館）
2002.6-11	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 （和歌山県立橋本高校、耐久高校、伊都高校、大成高校、箕島高校、和歌山北高校）
2002.7	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会（紀淡海峡交流会議）
2002.8	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 （和歌山県立高校書道連盟夏期合宿研修講演）
2003.4-2005.3	新生わかやま共同研究支援事業助成研究 研究代表者 研究題目：高野山古地図を利用した自己増殖的デジタル教材の作成
2003.4-2007.3	科学研究費補助金 基盤研究（A）（1）共同研究者 研究題目：歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究
2003.8	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会（和高国研）
2003.10	わかやまアーカイブチャンネル審査委員（和歌山県より委嘱）
2003.11	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会（和歌山インフォフェア）
2003.12-2007.3	高野山真言宗 I T 事業推進委員
2004.4-2005.3	全国マルチメディア祭 in わかやま実行委員
2005.4-2006.3	和歌山県教育 iDC(internet Data Center)委員
2004.9.25-26	高野山カンファレンス 2004（デュルケーム・デュルケーム学派研究会合同研究会）in 高野山受入れ
2005.4-	全史料協近畿部会運営委員（現在に至る）
2005.7-2009.3	オーラルヒストリーの会事務局
2006.4-2007.3	大学等地域貢献促進事業助成研究 研究代表者 研究題目：3DCG を用いたインタラクティブな高野山立体地図作成の研究
2006.4-2009.3	科学研究費補助金 基盤研究（B） 研究代表者 研究題目：オーストラリアと日本の自治体における業務記録管理システムの比較研究
2006.5	高野山まちづくり研究会メンバー（ウェブサイト担当）（現在に至る）
2007.11.2-3	日仏コローク in 高野山受入れ
2009.4-2013.3	科学研究費補助金 基盤研究（B） 研究代表者 研究題目：国際比較に基づくアーカイブズと社会の関係に関する総合的研究
2012.4.1-	高野山真言宗人権委員会委員

2012.10.13	デュルケーム／デュルケーム学派研究会 in 高野山受入
2013. 4. 1	日仏社会学会理事（研究活動担当）
2014 - 2018	Board Member of RC25 of International Sociological Association (ISA)



大学行政への係わり（所属委員会）

2001(H13)	自己点検基本事項検討委員会 学生募集対策委員会 同和研究会 情報処理委員会
2002(H14)	自己評価点検委員会 情報処理委員会 学生募集対策委員会 学生部協議会 図書館協議会 大学生協監事
2003(H15)	情報処理委員会（委員長） 自己評価点検委員会 学生部協議会 リエゾンオフィス 学生募集対策委員会（年度途中より委員長） 選挙管理委員会 図書館協議会 大学生協監事
2004(H16)	情報処理委員会（委員長） 自己評価点検委員会 リエゾンオフィス 学生募集 対策委員会（委員長） 図書館協議会 選挙管理委員会 大学生協監事
2005(H17)	情報処理委員会（委員長） 自己評価点検委員会 リエゾンオフィス 学生募集 対策委員会（委員長） 図書館協議会 選挙管理委員会 大学生協監事
2006(H18)	共通教育センター主任 情報処理委員会（委員長） 自己評価点検委員会 リエ ゾンオフィス 学生募集対策委員会 図書館協議会 大学生協監事
2007(H19)	共通教育センター主任 学生募集戦略本部 自己評価点検委員会 図書館協議 会 大学生協理事長
2008(H20)	共通教育センター主任 学生募集戦略本部 自己評価点検委員会 大学生協理 事長 戦略的の大学連携支援事業 コンソーシアム和歌山
2009(H21)	学生募集戦略本部 企画広報委員会 自己評価点検委員会 人権研究会 大学 生協理事長 戦略的の大学連携支援事業 コンソーシアム和歌山
2010(H22)	学生募集戦略本部 企画広報委員会 自己評価点検委員会 人権研究会 I T 管理委員会 戦略的の大学連携支援事業担当 コンソーシアム和歌山担当 大学 生協理事長
2011(H23)	学生募集戦略本部 企画広報委員会 自己評価点検委員会 人権研究会 I T 管理委員会 戦略的の大学連携支援事業担当 コンソーシアム和歌山担当 大学 生協理事長
2012(H24)	副学長（教務担当） 教務委員会 大学院委員会 学生部協議会 自己点検評価 運営委員会 自己点検評価検討委員会 人権教育研究会 人権委員会 I T管 理委員会 コンソーシアム和歌山担当 大学生協監事